

## 第1回アジアについての勉強会

1. 日時：2010年8月3日（火）15:00～17:00

2. 場所：武田計測先端知財団会議室

3. 講演タイトル

「マレーシアの社会と経済」

講演者 国際社会貢献センター 宇野好和氏

4. 出席者：

|    |       |                         |
|----|-------|-------------------------|
| 01 | 宇野好和  | 国際社会貢献センター              |
| 02 | 小林信一  | 筑波大大学院ビジネス科学研究科教授       |
| 03 | 渡辺孝   | 芝浦工大大学院工学マネジメント研究科長・教授  |
| 04 | 金澤恒夫  | エクセルオブメカトロニクス株式会社 代表取締役 |
| 05 | セヌー   | 在日ベナン人協会 会長             |
| 06 | 森脇    | 日本マイクロファイン元社長           |
| 07 | 小山田和仁 | 日本学術振興会 国際事業部           |
| 08 | 武田郁夫  | 財団理事長                   |
| 09 | 赤城三男  | 財団専務理事                  |
| 10 | 垂井康夫  | 財団常任理事                  |
| 11 | 溝渕裕三  | 財団理事                    |
| 12 | 大戸範雄  | 財団理事                    |
| 13 | 相崎尚昭  | 財団 Program Officer      |
| 14 | 姥澤愛子  | 財団 Program Specialist   |
| 15 | 禿 節史  | 財団 Program Specialist   |
| 16 | 鴨志田元孝 | 財団 Program Specialist   |
| 17 | 三井恵美子 | 財団 Program Officer      |
| 18 | 高見    | 財団職員                    |

5. 議事録

司会：

国際社会貢献センターというのは、商社の業界団体、日本貿易会が設立したNPOで、商社OBによる社会貢献を目的としている。商社のOBには様々な知識、経験を持っている方がおり、そのような人材をプールして、社会の求めに応じて活動をするという大変ユニークな組織である。本日の講師の宇野氏は、1976年

に広島大学の大学院工学系研究科を卒業され、三井物産に入社された。1989年から1995年にかけて三井物産クアラルンプール支店の機械部長として日本からのマレーシア向けプラント導入を担当され、本日はその時のご経験を元にマレーシアについてお話していただくことになる。1995年以降は、日本に戻り、三井物産の通信機械・電線部の営業部長、ディスプレイ事業部長、三井物産エレクトロニクス株式会社の社長等を歴任されている。

講師:

私がマレーシアにいたのは、もう15年も前になるので、その当時からするとマレーシアは随分変わり、私の経験は古くなっていると思うが、私は、マレーシア大好き人間で、仕事で離れてからも度々マレーシアに行っている。今日は、そのようなマレーシア大好き人間の話ということで、聞いていただきたい。1989年に行った時は、車はほとんどなかったが、1995年にマレーシアを離れる時は、クアラルンプールには車が溢れ、89年には自宅事務所間は15分で行けたが1時間以上かかるようになっていた。

### **マレーシアの概要**

マレーシアは、マレー半島南部とボルネオ島北部を領域とする連邦立憲君主制国家。イスラム教の国で、国王は5年の輪番制で、9州のスルタンが交代で務める。ほとんど名誉職。国土面積は、約330,000平方キロメートル、日本の90%同程度の広さで、シンガポール、タイ、インドネシア、ブルネイと国境を接している。人口は、約2,700万人で、マレー人が約6割、中国系が3割、インド系1割という構成。マレーシアには、19世紀にイギリスの東インド会社の拠点があり、プランテーション経営のために彼らがインド人や中国人を連れてきた結果、マレーシアには中国系やインド系の人々の人口も増えてきた。19世紀後半になってから、ボルネオ北部とマレー半島がイギリスの植民地になり、1942年に日本が占領するまで、イギリスによる統治が続いた。日本によるマレー半島の占領は、長く続いた白人(イギリス)による統治をアジア人である日本人が打ち破ったという点でマレー人にアジア人としての自信を与えた点もあり、日本人を尊敬する人が多々いた。今ではそうでもない点もあり、日本は尊敬しているが、日本人が尊敬されているかは疑問である。マレーシアは、ブミプトラ政策というマレー人を優遇する政策をとっており、マレー人はインド系や中国系の人々より公務員の採用、企業の設立、金利等で優遇されている。マレーシアでは、民族衝突事件が起きたり、共産主義者の反乱も起きていたが、マハティール首相の時代になってからは比較的平和な時代が続いており、工業化による経済成長を達成したことで東南アジアの優等生と呼ばれている。但し、政治的には、アメリカ流の民主主義はまだ、時期尚早と考えており、首相が変わっ

でもマハティールの提唱による「独裁による経済成長路線」が続いている。公用語は、マレー語であるが、イギリス領だったことで英語を話す人が多い。そのため、データセンターの誘致等で有利である。マハティール首相時代(1981～2003)に様々な分野で国産化を推進する政策や、欧米ではなく日本や韓国を見習う「ルック・イースト」政策が打ち出された。

マレーシアの GDP は、2008 年で約 20 兆円。産業としては、天然ゴム、錫、工業製品(電化製品、コンピュータ部品等)の製造が盛んである。米国のデルコンピュータのアジアにおける生産拠点になっている。テレビのリモコンのようなものはほとんどがマレーシア製だったが、デジタルになってそうでもなくなった。これは私見であるが、マレーシアでは、このように電化製品やコンピュータ部品の製造が盛んであるが、これらはあくまで IC のアセンブリ産業であり、正確に動く部品が必要なプリンターのような可動部分のある製品の製造は、まだ難しいと思われる。

マハティール時代に打ち出されたアジアカー政策により、三菱自動車の技術を導入したプロトンやダイハツ工業の技術を導入したプロドゥアが国産車を製造し、両者で国内シェアの大半を占めている。しかし、プロトンについては、三菱は経営に対する意見の相違から途中で手をひいた。また、IT にも力を入れ、首都のクアラルンプール周辺に IT インフラが整備された「マルチメディア・スーパーコリドー」が建設されている。私は、日本からのプラント導入を手掛け、マレーシア全土の公衆電話、高速道路のゲート、電話交換機、空港建設等に関わった。アメリカからの支援はなかったため、円借款はマレーシアにとって大きな助けになったと思う。

政治的にはやや反米な面もあり、アメリカを中心とする安全保障体制には組み込まれていない。イギリスのコモンウェルスに入っている。マレーシアはイスラム教国であるが、利子は取る。この点でアラブのイスラム教国とは異なっている。義務教育は無料であるが、裕福な中国系の子供は私立の中国学校へ行き、インド系はインド学校へ行く。マレー人で優秀な人間は、オーストラリアかイギリスの大学へ行く。中国系の人々は私企業でお金儲けを目指し、マレー人は高級官僚を目指す。麻薬に対しては非常に厳しく、所持しているだけで死刑になる。

## 質疑応答

質問者 1:

マレーシアと国境を接しているタイの南部は、イスラム教圏であり、イスラム原理主義者による反乱が頻発して大変危険な地域と聞いている。タイと国境をせつしているマレーシア側の治安はどうなっているのだろうか。

講演者：

タイ南部は宗教的にタイ中央部や北部とは異っており、イスラム化運動が盛んで治安は時として悪い。国境を越えたマレーシア側はそのような問題はなく、治安も安定している。